

軍艦「名取」の最後

新潟県 金子富雄

私が体験した海軍軍人としての戦闘・訓練中、今日まで忘れることの出来ないことは、軽巡洋艦「名取」の最後と、艦と運命を共にし、あるいは救助されず海没された戦友のことである。

開戦以来軽巡「名取」は第三艦隊第五水雷戦隊の旗艦として南西方面各地攻略作戦に参加し、以後、第二艦隊第十六戦隊に属して海上警備に当たっていたが、昭和十八年一月アンボン近海で敵潜水艦の雷撃と航空攻撃によって損傷、応急修理のためシンガポールで入渠。その後内地で修理され、戦闘準備完了後、再びフィリピン・ミンダナオ島ダバオに向かって輸送船団五隻を護衛しながら内地を出港した。

以後、フィリピン群島を幾度かマニラからパラオ諸島に往復した途中、幾度も敵の魚雷攻撃を受けた。本

艦の任務は、米国艦隊がフィリピンを攻撃する足がかりを築くために、パラオ群島を奪いに来るのを阻止するパラオ作戦にともない、第三号輸送艦と共にパラオへ物資を緊急輸送することであった。当時は巡洋艦も運送屋の一役をになわざるを得なかった。兵糧・大砲・弾薬・医薬品・航空用魚雷が本艦には所せましと満載されていた。

私たちがマニラを出港したのが昭和十九年八月十四日、一度洋上に出たのだが米艦隊が近くにいるため一時セブ島に引き返し、様子を見て再び第三号輸送艦と共にパラオ島へ出港したのが八月十七日午前十時ごろであった。何分にもサイパン島玉砕後のことでもあり、米国潜水艦は必ず近くに潜伏していることは予測されていた。でも米軍が目指すであろう地点の防備を強化することは至上の命令であった。

第三号輸送艦のスピードはきわめてのろく、二十ノット以上は出せないという悪条件があり、本艦も一緒にジグザグ航行を続けつつ進んでいった。何日も通るコースとは違って敵に対し針路目標をくまらずべく、

速回りして北に針路を取り航行をはじめた。不気味な海面には波浪が激しく、艦は波にもち上げられ、ローリングで波の谷間に落ちこんでいく。何トンもの重量の水が艦橋や上甲板に落下し、飛び散っては将兵の上へ降りかかる。波の所々に白い泡が立ち、彼方は混沌と激動のほかは何一つ見えぬ深い夜の世界だった。

午前零時、艦は針路を南にとり、まっすぐにパラオに向かった。速力も輸送艦に同行した二十ノット、本艦としては一寸のろまなスピードであった。航程もすでに半ばに達している。

苦闘も半ばを超えたといつてよいころであった。戦後「名取」を撃沈したアメリカ潜水艦「ハードヘット号」の艦長から、当時の話を聞く機会があったが、艦長の話では、このときアメリカ潜水艦「ハードヘット号」はフィリピン東方海上を哨戒しつつ、レーダーにはっきりと本艦の姿をとらえていたというのであった。「ハードヘット号」は一時間「名取」を追跡し、発射地点に達するや五本の魚雷を艦首発射管より発射、それから一分置いて艦尾発射管から電池魚雷を四

本一斉に発射したのであった。「名取」本艦はまだ気づかず所定の針路を航行しつつ、魚雷を発見したのは、後続の第三号艦が先であった。夜空に青信号が高く打ち上げられた。「右舷に雷跡見ゆ」の緊急信号である。艦長はとっさに急速転舵を命じた。大きく傾斜した艦は攻撃を避けようとしたが時すでに遅かった。昭和十八年八月十八日午前二時頃であった。

「艦内総員配置につけ」の警報が鳴りひびき、私も部署に着いた。すると物すごい衝撃と共にある者は海中に投げ出され、ある者は上甲板にたたきつけられ、火傷する者、絶叫する者で一瞬のうちに本艦は大混乱となり、惨状は目を覆うものであった。全員必死の苦闘もむなしく午前六時三十分頃、本艦はついに力尽きて沈没したのである。サマール島の東方約三百カイリ、北緯十二度二十九分、東経百二十八度四十九分の地点の太平洋であった。

私も海中に飛び込む、兵隊はわれ先にと筏にすがり、カッターや内火艇へと泳ぎ、助けを求めた。その後暴風雨と闘い、フカと闘い、風浪のなすがままに運命を

共にまかせて苦闘する二十六日間の漂流が始まるのであった。私は「名取」と共に海の藻屑となることなく九死に一生を得、何とか生きて帰ってこれたのは太平洋戦争の奇跡の一つといっても過言ではないであらう。

海上特攻艦隊戦艦「大和」と共に

岐阜県 牧野 義美

私は岐阜県恵那郡付知町で、父末吉の三男として、大正十二年九月五日に誕生しました。地元の尋常高等小学校を卒業後、昭和十八年四月、海軍を志願して、広島の大竹海兵団に入団しました。以来、日本海軍独自の「月月火水木金金」の猛訓練によく耐え、逞しい海軍の精鋭たるべく成長したのです。

しかし、私が一生忘れることの出来ないことは、祖国の盾といわれた沖繩決戦、海上特攻艦隊の旗艦「大和」に乗り、出撃して九死に一生を得たことでありま

す。ありし日の日本帝国海軍の栄光の中で燃焼し尽くした青春があったことであります。

海兵団で三ヵ月間の新兵教育を受け、十二・七センチ砲員（副砲）として戦艦「伊勢」に乗り組み、十八年七月、南洋群島のトラック島に出動。十二月、呉軍港に帰港し「伊勢」を退艦して呉海兵団に仮入団しました。

十九年二月、戦艦「大和」に乗り組み、二十五ミリ機銃員として配置に付いたのです。戦艦「大和」はご承知のとおり、世界に群を抜く超弩級戦艦であり、長く日本民族の誇りとするに足る戦艦でした。そして私はサイパン沖作戦や、捷一号作戦といわれる比島沖海戦にも出動しました。

しかし、残念ながら比島海戦は完敗に終わり、その後の日米決戦に最後の断を下したものであるといわれています。その後が、菊水一号作戦といわれる沖繩への「海上特攻隊」としての出撃であります。

二十年四月一日、米軍の四個師団が沖繩本島の嘉手納海岸（中飛行場北西）等の上陸し、その日のうちに